

おじいちゃんにもらったもの

小 四

ぼくのおじいちゃんは、ぼくが生まれたとき、ものすごく喜んでくれました。泣いて喜んでいたそうです。ぼくの生まれた病院に毎日通ってくれました。

おじいちゃんは、ぼくが生まれてすぐ、がんが見つかりました。生きていられるのは、あと二年と言われたそうです。おじいちゃんは、ぼくが小学生になってランドセルをせおうすがたを見たいと言っていました。でも、のこり二年の命では見る事ができません。おじいちゃんは、大きな病院にう

つってがんとたたかうことにしました。たくさんの薬を飲んだり、点てきをうけたり、手じゅつをしてがんをとったりました。

たくさんのつらいちりょうをして、おじいちゃんは、ぼくのランドセルすがたをみる事ができました。二才年下の弟のランドセルすがたも見る事ができました。でも、おじいちゃんは、弟の入学式直後にたおれてしまいました。

おじいちゃんは、弱った体を引きずって、ぼくの野球の試合やじゅう道の試合を見に来てくれました。立っているとふらふらしてしまうので、すわっておうえんしてくれました。

ある日、おじいちゃんが言いました。「もう見に来られないかもしれない。」

ぼくは、おじいちゃんなぜそんなことを言うのかわかりませんでした。それから、おじいちゃんはすぐに入院しました。お母さんは、おじいちゃんの病院に通うようになり、家にないない時もふえてきました。お母さんは、ぼくと弟に言いました。

「おじいちゃんは、もう長く生きることは、できないんだよ。」

家族でお見まいに行きました。おじいちゃんは、ぼくたちに会えてとても喜んでいるようでした。おじいちゃんは、ものすごくやせてしまいました。病院に行くと、おじいちゃんはぼくたちにアイスを買ってくれました。帰るときは、いつまでもぼくたちを見送ってくれました。

でも、いつも元気だったおじいちゃんの声は、だんだん小さくなっていきましました。おじいちゃんは、小さな声で「野球がんばれ。」とぼくに言いました。

入院して一カ月後、おじいちゃんは、意識がなくなりました。お母さんは、病院にとまるようになりました。

「家族でがんばろう。」

と、お母さんは言いました。ぼくは、お兄ちゃんなのでがんばろうと思いました。

おじいちゃんは死んでしまいました。ぼくは、悲しくて悲しくて泣いてしまいました。やさしくていつもぼくたちをかわいがってくれたおじいちゃん。たくさん公園にも連れて行ってくれた

り遊んでくれたりしました。おじいちゃんにとってぼくは元気になるそんざいだったかもしれないが、ぼくにとつても大切なおじいちゃんでした。

おじいちゃんは、最後まで生きることをのぞみました。ぼくが二十才になるまで生きると、がんばっていました。でも、ぼくが九才になるまでしか生きることができませんでした。おじいちゃん病気でたたかっていたが、ぼくが見て、ぼくもどんな時でもがんばろうと思いました。おじいちゃんが死んでしまった悲しいけれど、おじいちゃんから教わったことは、たくさんあります。そして、おじいちゃんからたくさんの愛じようとやさしさをもらいました。

おじいちゃんの最後の声は、ぼくには聞こえませんでした。でも、小さな声で何か言っていました。おじいちゃんは、

「もうちよっと生きてかった。」

「空の上で見守っているよ。」

「大人になるまでがんばれ。」

と言っていたような気がします。その時は何も言えなかったけれど、今だったらこう言えます。

「ぼくがおじいちゃんからもらった愛じようとやさしさは、おじいちゃんには返せないけれど、ぼくもたくさんのおじいちゃんから教わったことを、家族や友だちなどまわりのみんなに分けてあげたい。」